

ワケありシンデレラは  
敏腕社長に売約済！

シンデレラがガラスの靴を落とさなかったら、どうなっていたのかな。

王子様は永遠に彼女を探し続け——いや、無理か。

きつと王子様はシンデレラを思い出して国のため他の人と結婚し、シンデレラは義姉たちに老いた義母の面倒を押し付けられて、すれ違ったままだったはず。

けれど、これじゃ夢が無さ過ぎる。なら、ガラスの靴が脱げたのも、魔女がかけた魔法のひとつだった、というのはどうだろう。シンデレラが舞踏会に行くと決めた時点で、運命は彼女の味方をしていたのだ。そういう魔法を、もし自分にもかけて貰えたらと思うだけでワクワクする。

久我夏帆は、そんな妄想をしながら化粧を終えて立ち上がった。

「アンティークな家は今日も情緒に溢れています」

古い畳のぼこりと凹む所を爪先でべこべこと踏みつつ、中断していた妄想を再開させる。

王子様はずっと前からシンデレラを知っていたとすると、もっと良い感じかもしれない。

シンデレラに会うためだけに、王子様は大掛かりな舞踏会を開催する事を決めた。本当はドレスも靴も与えたかったけれど、彼女は王子様からの贈り物を受け取る事が出来ない。だから、魔法の

中にひとつだけ現実をまぜる事を魔法使いにお願ひした。

——もし彼女が途中で帰っても探せるよう、靴だけは本物にして欲しい。

そんな健気な王子の願ひを、魔法使いは叶えた……と考えたら、その後の妄想の内容は魔法使いが活躍する展開になってしまった。妄想力はある方だが、恋愛に関しては不得意だ。

玄関ドアの向こうからしとしとと雨の音がする。夏帆は足首まである青のレインブーツを履き、お気に入りの傘を手に持った。

唯一の家族である父親も、今日は朝から仕事に行っている。

夏帆は父とふたりで住んでいる狭いアパートの部屋へ向かって「いつてきます！」と元気に挨拶をし、颯爽と玄関を出た。

家から駅までは、歩くにはちよつと長い十五分弱の距離。夏帆は交通量の多いこの道路沿いの、広いきれいな歩道が好きだった。

いつもはビュンビュンとぼす自転車が多いが、さすがに雨の日にはいない。危機感無くのんびりと歩けるのは雨の日の特権だ。

大きな水たまりを避け、蛇行して歩いていると、前から歩いてきた花柄の傘を差した五十代くらいの女が立ち止まった。彼女は胸を押さえ、みるみる顔を真っ青にしていく。

「だ、大丈夫ですか？」

夏帆は考えるよりも先に駆け寄っていた。近寄ると、血の気が無い女性が瞬きもせず夏帆を凝

視してくる。

「ええ、ええ。ありがとう」

彼女がちゃんと息をされていて、喋れる事にほつとした。

「とても顔色が悪いですよ。おうちの方に連絡出来ますか？ 迎えに来て貰えますか？」

具合が悪そうな人を雨の中に放っておく事は出来ない。出社時間までには余裕があったので、夏帆は彼女の顔を覗き込む。

「私、一緒に待ちますから」

女性は品の良い化粧をしていて、着ている洋服からも経済的な余裕を感じられる。連絡さえけば誰かがすぐに迎えに来てくれそうな気がした。

「ありがとう。でもね、大丈夫なの。お気持ちだけでじゅうぶん」

夏帆はじつと彼女の顔を見つめて「本当に？」としつこく聞く。嫌がられるかもしれないが、後で何かあった方が嫌だ。

「ええ、実はもう連絡はしていて、——む、息子が来てくれるの」

「そうですか！ 良かった……」

差している傘が少しずれているせいで、女性の肩が濡れている。それに気付いて、夏帆はバッグからハンカチを取り出した。

「肩が濡れていますよ。春先とはいえ、まだ寒いから風邪を引かないように気を付けて下さいね」

なぜか茫然とした女に、無理矢理ハンカチを握らせる。その様子にまた不安になって、夏帆は聞く。

「本当に、一緒にいなくていいですか？」

我ながらしつこいと思いつつも、やはり心配だ。

「ええ、大丈夫。ありがとう。もう行って下さいな。出勤途中でしよう？ 遅刻したら大変だわ」  
目を潤ませて感謝の言葉を述べられた上に心配までされると、さすがに居づらい。

「では、失礼しますね。お大事にして下さい」

これ以上はもう迷惑だろうと、夏帆は頭を下げて立ち去る事にした。

それでも迎えが来るかはどうしても確かめたくて、ゆっくり歩きながらちらちらと振り返る。

すると、どこから現れたのか、黒塗りの車がああ女性の横に停車した。雨を弾き光る高級車に驚くと同時に、本当にすぐに迎えに来てくれた事にホッとする。

ハザードランプを点滅させた車の後部座席のドアが開いた。スーツにくるまれた長い腕が出てきて彼女の傘を手取る。それを見た夏帆は、思わず声を上げる。

「……わ」

スーツには詳しくないけれど、生地的光沢が違うのがわかった。先程の女性が慣れた様子でさつと車に乗り込む。品が良さそうだとは思ったが、本当にお金持ちだったのだ。自分とは全く縁の無い世界に、夏帆はほうつと息を吐く。ドアが音を立てて閉まり、車が横をすうっと通り過ぎていった。窓にスモークが貼られていて中は見えない。しかし中からは外が見えているはずだ。夏帆は笑顔でちょこんと頭を下げて、追い越していく車に話しかける。

「迎えに来て貰えて良かったですね」

自分の出番は終わったと、ふっと気を抜いた瞬間、強い視線を感じ辺りを見回す。

五、六年程前から、時々こんな風に誰かに見られている感覚があった。妄想が酷いせいで厨二病になったのかと焦っていたけれど、ここまで明らかに視線を感じるのは初めてだ。

今はあの車から見られている気がするが、確かめようのない事を考えても仕方がない。

「ま、いっか」

妄想と並んで、現実ですつと素早く戻る事も特技のひとつで、夏帆はすぐ仕事について考え始める。今日の主なミッションは、引き出しに溜まり始めた営業部員の立替金伝票の処理。

日付やハンコが無いのは日常茶飯事で、なぜか領収書の原本ではなくコピーが添付されていたり、但し書きがいい加減だったりなど、一筋縄ではいかないものが多い。一枚一枚、確認していく作業は、地味だが大変だ。おまけに伝票の訂正は営業部員を捕まえて直接頼まないといけない。彼らのデスクに置くと、書類が埋もれてしまうのだ。

疲れていてたまに不機嫌な彼らではあるけれど、明るく元気にお願いと伝票の処理スピードが早くなる。その事に気付いてから、夏帆はうまく仕事を回せるようになった。

いつも訂正して欲しい場所にメモ書きした付箋を貼っているが、今日は先日、文房具コーナーで見つけた、かわいい猫のスタンプも押してみるつもりでいる。

「でも、さすがに部長には無理かなあ」

まず誰にあのスタンプを押しみようか。営業のメンバーを思い浮かべながら、夏帆は水たまりをジャンプして避けて、また気持ち良く道を歩き始めた。

——理想の世界と違っていてもいいじゃない。一緒に楽しい部分を数えよう。昔、そう言った母と、住居としていた狭い部屋の冒険に繰り出した事がある。

そうして部屋の片隅にいた小さな蜘蛛をモンスタールに見立てて、ふたりでキヤーキヤーと笑いながら怖がったのも良い思い出だ。それらの積み重ねが今の妄想力に繋がっている気がする。あれから夏帆は、つらい現実には負けないよう妄想で乗り切るようになった。

でも、そんな風に前向きでいる事が無理な時だってある。

『俺の青のタオルはどこだ』

裏紙を使って猫のスタンプを試し押ししていると、父親からメールが入ってきた。

仕事中だから無視しようかとも思ったが、そうすれば返事をするまでずっと送られてくる。それを考えると、重苦しい気分になった。

父子家庭、という環境で生きてきて得られたものは沢山あった。けれど、得られなかったものもある。その最たるものは、自分の時間。

『明日、洗濯するつもりだよ。晴れみたいだから』

語尾に笑顔の絵文字をつけるのも忘れない。

仕事後はいつも時間との戦いで、昨日は食料品の買い物最優先にした。重い買い物袋を手を提げて帰りつき、洗濯物の山に手をつけようとはしたが、雨の天気予報に洗濯をやめたのだ。

『コインランドリーがあるじゃないか』

自転車で十分の所に確かにあるが、食事の用意をした後に行けば良かったという事だろうか。

『しっかりやって下さい』

「むかつく……」

どこまでも上からなメールに、思わず声に出して文句を言ってしまった。父は、何故か青のタオルにこだわりがある。なら自分で洗濯をしてお願いをしても聞き入れられる事はない。

暗い気分になりそうになっていると、同僚で、部内一番の美人、石田美雪に肩を小突かれた。

「眉間の皺、ウケるんだけど」

「ええっ」

やばい、と夏帆が慌てて指で眉間をぐいと広げる様子に美雪が笑う。その笑顔に釣られて夏帆の頬も綻んだ。

「何、その猫スタンプ」

そう言いながら、美雪がレーズンサンドを二個手渡ししてくる。包装に書かれた有名菓子店の名前に、夏帆は目をキラキラさせた。

「え、なになに、貰ってもいいの。すっごく嬉しいんだけど」

「取引先からの手土産だつてさ。夏帆を太らせようとしてるだけだから、感謝しない方がよいよ」  
お土産のお菓子はポットやコーヒーが置いてある辺りに置くようになっていて、自らチェックしにいかないとありつけない。美雪はわざわざとってきてくれたらしい。

「ほんつとにこのレーズンサンドは美味しいよねえ。いつもありがとう！」

素直に喜ぶ夏帆に美雪はまた笑って、裏紙に数十個は押しである猫スタンプを指でくると困った。

「で、これ何」

「伝票訂正お願いします、の付箋に押そうかと思って」

夏帆がうきうきと紙を持って顔の前にかざすと、美雪は苦笑した。

「まあ、夏帆がやればかわいさ倍増か……。てかさ、手渡しをしてるだけで十分だと思うよ。前任の小崎さんは、『営業は伝票を間違う上に、机に置けば埋もれさせて、そのくせ入金処理が遅れてるーって事務と経理に文句つけるのが許せん』って、最終的に訂正がある伝票をディスプレイにゼロテープで貼ってたじゃん」

「はは……」

以前、立替金の書類を担当していた小崎と営業の戦いは有名だった。そのせいで部内の空気が悪くなっていた事に頭を痛めていた上司が、小崎の後任として白羽の矢を立てたのが夏帆だ。

「明るくて元気で素直で従順って、面倒くさいものを押しつけられるよね」

「美雪さん、言葉をもう少し選んで貰えると嬉しい……」

思い当たる事があり過ぎて、夏帆は裏紙で自分の顔を隠す。確かに小学生の時から、人がやりたがらない係がよく回ってきた。

「人の事ばっか考えてないで、自分の事も考えなよ。そのスタンプはかわいいと思うけど」

「うん、ありがとう」

とはいえ、仕事なのだからやらないという選択肢は無い。とにかくやってみるという姿勢でやってはきたが、そうすると他人優先になってしまいうのかもしれないなかった。

……難しいなあ。

柄にもなく考え込んでしまった夏帆の肩を叩いて、美雪が席に戻っていく。その手にレーズンサンドが無い事に気付いた。

「あれ、自分のお菓子は」

夏帆が慌ててレーズンサンドをひとつ差し出すと、美雪は首を横に振った。

「甘いもの食べて、その眉間の皺を伸ばしなさいよ。私はお金持ちだからいくらでもあのレーズンサンドを貰えるの」

「あ、金持ちネタ。……いつもありがとう」

美雪はそう言って、よくいろいろなものを与える。妹が自然派化粧品のお店に勤めているという事で、内緒にしてねと言いながらテスターとして出していたせっけんなども、余裕の無い夏帆へわけてくれるのだ。

それなのに、と机の上に視線を戻した所、スマホが目に入って、父親とのやりとりを思い出した。夏帆は眉間に皺を寄せるのを堪えて溜息を吐く。

『タオルは明日の朝に洗います。ごめんね。今日は飲み会だから夕ご飯は冷蔵庫に入れてあります』  
怒っても不貞腐れるだけなので、受け流すようになったのはいつからだろう。自分の事しか考えない人と一緒にいると、自分自身がなくなっていく。

夏帆はメールの送信ボタンを押しながら、レーズンサンドを齧った。

いつか父親と離れないといけないと感じていたが、そろそろその時が近い気がする。

力を込めずにポンツと押したスタンプはかすれも無く、インクも滲まらずきれいで、夏帆はよしと笑みを浮かべた。

夕方まで勢いよく降っていた雨は、部の飲み会が終わる頃にはやんだ。会社から程近いチェーンの居酒屋の狭い個室で行われた会は終始和やかで、皆楽しそうにしていた。

夏帆は自宅の最寄り駅で電車を降り、濡れた道を軽やかな足どりで歩く。人がまばらになると、傘の石突をコンクリートにコツンと打ち付け、ぐんつと拳を夜空に突き上げた。

先程の飲み会で女子社員の憧れである、営業部のエース小池久二にミスの無いデータ入力を褒められたのだ。

明日も頑張ろう、と考えて拳を突き上げたままでいると、その向こうに満月が見えた。

一軒家のブロック塀の上からハクモクレンの花を咲かせた枝が伸びている。その光景に、浮かれていた心がすつと落ち着く。

「そっか、そんな時期か」

ぼつりと呟く。この時期のある日、貧しくとも日常を楽しむ事を教えてくれた母がいなくなった。夏帆が小学校から帰り、鍵を開けると部屋は誰の気配も無くガランとしていて、いつも漂ってくる味噌汁の匂いも無かった。寂しくて玄関で靴も脱がずに膝を抱えて泣いた事をぼんやり覚えている。

『お母さんが帰ってきますように』と願った日々の鈍い痛みを、花の甘い香りを吸い込んで隠す。

父親に母親の事を聞いても答えてくれないまま、もう十年以上経つ。その時からずっと、夏帆は父親とふたりで昭和感溢れる木造二階建てアパートに住んでいた。アパートは古いが、一階に住んでいる大家が管理人として共用廊下や階段を毎日掃除してくれるのできれいだ。

いつも何かと気にかけてくれる気の良い老夫婦が、夏帆は大好きだった。そう、人生は悪い事ばかりじゃない。

角を曲がるとアパートに着く。黒塗りのピカピカ光った車と、それを怪訝そうに見ている大家夫婦の姿が目に入った。一日に二回も同じような黒塗りの車を目にするなんて、と夏帆は首を傾げる。

「ああ、夏帆ちゃん」

「こんばんは」

帰ってきた夏帆に近寄ってきたのは妻の加代だ。既に二十二時で、いつもなら寝ているのだろう、パジャマの肩にカーディガンをかけている。

「今ね、家を引き払うって、男の人が来てね。夏帆ちゃんが心配で」

「家を引き払う？　うちが？」

覚えのない話に笑顔のまま固まってしまう。そんな夏帆の腕に、加代が触れる。

「私たちもそんな話を聞いていなかったから、驚いちゃって。またあの……」

嫌悪感で語尾を濁した加代の言葉の続きを、夏帆は穏やかに引き受ける。

「うちの父親が迷惑をかけているんですね」

良く言えば自由人の父親は、大家夫婦に嫌われているのだ。

夏帆は諦めと落胆を覆い隠すように深々と頭を下げる。

「本当に、ごめんなさい」

「何か危険な事があったらいけない。俺も一緒に上がってやるから」

いつも寡黙な夫の孝蔵が、夏帆に向かって力強く言った。

「ありがとうございます。でも、大丈夫です。いつもの事だから」

夏帆が寂しげに笑うと孝蔵と加代は顔を見合わせる。そう、いつもの事で、今日は黒塗りの車と  
いうオプションが付いているだけ。

「何かあったらすぐに叫んで、うちに駆け込みなさいね」

大家夫婦はいつもこうやって夏帆に親身になってくれる。助けを求めた事はないが、気にかけて  
貰えるだけで気持ちには楽になった。

「はい。ありがとうございます」

加代と孝蔵は目を合わせ、同時に溜息を漏らす。

「ほんと、こんなになんとした良い娘がいるのに、なんでまた……」

孝蔵の悪気の無い言葉に、夏帆の気持ちはきゅつとなった。

「そんな良い子じゃありませんよ。夜分遅くに迷惑をおかけして、本当にごめんなさい」  
ぺこりと頭を下げて、ふたりの心配を背に外階段を駆けるように上る。

……今日も良い日だから、大丈夫。

昼間、同僚とコンビニで面白がって買ったお菓子のおまけが四葉のクローバーだった。美雪には  
レーズンサンドをふたつ貰って、飲み会では営業部のエース小池に褒められた。

お父さんを叱って、それから眠れば良い。そうすれば明日はいつもの朝が来る。

「ただいま。お父さん、いる？」

どきどきしながら玄関に入って電気をつけると、三和士から上がった所で父親が正座をしていた。  
「わっ！」

思わぬ場所にいた父に、驚きのあまりよろける。

作業着姿の父親・弘樹は、いつもの無邪気な笑顔を浮かべた。

「夏帆、喜べ！ 金持ちになれるぞ！」

「は？」

何かと場の空気を読めない父親だが、これは酷い。夏帆はまだ妄想と現実の違いはつく。

「お父さん、夢を見てないで現実を見て。家を引き払うって何なの。大家さんが心配してたよ。と  
ても良くして下さっているのに、迷惑をかけるのは駄目だよ」

弘樹の不機嫌のボタンを押さないように言葉を選ぶ。彼は一度へそを曲げてしまうと面倒くさい。

「今から大家さんに謝りに行こう。あの黒塗りの車はうちと関係ないよね？」

「なんだ、高級車でも停まつてるのか」

夏帆の心配もどこ吹く風、弘樹は上機嫌だ。ひとまず、あの車はうちとは関係がないらしいとわ

かつて安心しかけて——すぐ、ドキッとした。

キツチンの奥にある六畳間で、男が壁に寄りかかって立っているのが視界に入る。

古い家で天井が低いとはいえ、鴨居鴨居に隠れて顔が見えない程の長身。体に合ったスーツが高級品だという事は生地質感でわかった。

「お父さん……、お客様が来てるの……？」

輝く黒塗りの高級車の持ち主かもしれないと、冷汗が額ひたいに浮かんだ。

この状況に、あんな車なんて、怖い職業に就ついている人を連想してしまう。ドラマでよく見る展開に、夏帆は自分を守るみたいに腕を抱きながら、視線で男を示した。

「どちら様なの……」

「夏帆、あの人と結婚しなさい。お前の母さんの婆ばあさんと知り合いだから、心配する事はないよ」  
生まれて初めて、父親から母方の祖母の話がされた。しかも、結婚の話と一緒に。

言葉で頭を殴られたような衝撃を受けた。心臓がドクドクと打ち始め、体はどんどん冷えてくる。

「大家にはもうここを引き払うと話をしている」

「引き払うって本当だったの!? それに、何、急に、結婚」

知らない男と結婚という現実感のない展開に、何が何だかわからず夏帆は啞然あぜんとした。

父親の弘樹は正座をしたまま、唾を飛ばす勢いで話し続けるが、夏帆の頭には何も入ってこない。だが、次の言葉で否応なく現実じつじつに引き戻された。

「お父さんの借金を肩代わりしてくれたんだ。良い人だろう？」

結婚と借金というふたつの言葉の前に力を無くして、気付くと肩を玄関の壁に預けていた。

「待って、借金って……、全部でいくらなの」

総額を知りたかった。自分の奨学金の返済もあるが、働いているし、どうにかなるかもしれない。

「一千万だ」

「いつ……」

まるでスーパーで売っている野菜の値段を言うような軽い口調に、体から力が抜けてずるずるとその場に座り込む。

玄関に入る前に、今日も良い日だと囁ささやいていた自分の声が遠くに聞こえた。どうしよう、どうにかしなければ、という思考がぐるぐる頭の中を回って、うまく考えがまとまらない。

ただ、頭の片隅にとても冷静な自分もいて「父親を甘やかしては駄目だ」と自分を諭さとしてくる。ここで夏帆が借金を返せば、同じ事を繰り返し続けるだろうと。

「自分で返さないと、ダメだよ」

体に力を入れて、なんとか父親を見上げて声に出す。

「いいんだ。あの人はもう身内なんだから」

意気揚々とした台詞せりふに泣きそうになった。開き直りという言葉が体現している父親に目の前が暗くなるが、気弱になつている場合じゃない。まずは迷惑をかけている相手に謝罪しなければと気持ち奮ふんい立たせる。恐らく結婚うんぬんは父が勝手に言っているのだ。

「すいません、父がご迷惑を」

夏帆が顔も見えない男に謝ろうとすると、父親がそれを機嫌良く制した。

「いいんだよ。身内っていうのはな——」

「そこまでだ」

凜とした低い声に、夏帆はなぜか安心した。怒っているのでもなじっているのでもない、冷静な声色だったからだろう。

立ったまま話を聞いていた男が、頭を下げ、鴨居をくぐってきた。

「想像以上だな」

独り言ちた男の、視線を外せなくなる程整った顔立ちに衝撃が走った。目鼻立ちがはっきりしていて、長い睫毛が縁取る目には肉食獣のような強さと静けさが宿っている。髪は黒くて短く、額を全て見せる髪型。真つ直ぐな眉に自尊心の強さが見て取れるようだ。

狙われればきつと逃げる事など出来ない。そんな野性味を感じさせる大人の色香に釘付けになる。

男は夏帆と一瞬だけ視線を合わせた、すぐに逸らした。彼の素っ気ない態度に、こんな状況で見惚れてしまった自分が恥ずかしく思えて俯く。

男は夏帆がいる玄関に近寄りながら、流れるような動作でスマホを操作し耳にあてた。

「ああ、俺だ。もういい」

男は父親の真後ろに立ち、鋭く光る目で夏帆を見下ろす。高い鼻梁が作る影のせい、か、えもいわれぬ不安に襲われた。

「……あの、どちら様、でしょうか」

もういい、とはなんだろう。父親と自分はどこかへ連れていかれるのではないか、という不安に、夏帆は震える。

頭に思い浮かんだのは大家夫婦の顔だった。彼らに助けを求めたかったが、父親に借金があると知った以上、無関係な老夫婦を巻き込めない。

「ああ、羽成さん。これが娘の夏帆ですよ」

父親の媚びへつらうような口調にショックを受けて、夏帆の息が止まった。その様子を見て取ったのか、男はとても柔和な笑顔を向けてくる。

「俺は羽成義信といいます。驚かせて悪かったね。大丈夫かい」

義信は娘を指差す弘樹を無視して、自己紹介をしてくれた。

「羽成、さん」

「はい。久我夏帆さんで間違いありませんね」

こくこくと頷くと、彼もひとつ頷く。

「夏帆、年上の男は頼りがいがあるぞ」

父親も、いなくなつた母親より年上だつたはずだ。だが、夏帆が物心ついた時には、父親はあてにならず母親が働いていた。

「……お母さんは、お父さんを頼りにしてたの？」

「親に口答えをするもんじゃないぞ」

純粹な疑問に不機嫌そうな答えが返ってくる。

「だって」

夏帆がまた口を開きかけると、鍵をかけ忘れていた玄関ドアが開いた。ビクリと体を震わせた娘を気にした様子も無く、弘樹が膝を押さえながら立ち上がる。

「まあまあ、終わり良ければ全てよしだ」

振り返るとスーツ姿の男がふたりもいて、夏帆の体はガクガクと震え始めた。手を握り合わせて震えを止めようとしても止まらない。

このまま借金のカタに水商売をやらされるのか、あるいは海に沈められてしまうのか。サスペンスドラマで得た知識が夏帆の頭の中をぐるぐる回る。

「立てますか」

義信は弘樹を押しつけて、夏帆の冷たい手を上からそつと握ってくれた。

「あ……」

それだけで、夏帆の震えが少し収まる。そのまま義信に立ち上がらせて貰い、父親の横を通って家上がった。当たり前みたいに肩を抱かれて、彼に寄り添うように立つ。

義信は玄関の外で立っている男に指示を出した。

「頼んだ」

「了解です」

「後は若いふたりでつてヤツかな！」

場の重い雰囲気こそぐわない、弘樹の明るい冗談が空回りする。

「お父さん……」

背広姿の男ふたりが弘樹の両腕をがっちり掴むのを、夏帆は映画でも見るように眺める。やめて、待って、という言葉が出てこない。

「ああ、夏帆、後でな！」

後なんてない。そんな事は夏帆でもわかるのに、弘樹は笑顔だ。ドアが閉まって義信がドアの鍵をかけると、静かな部屋にふたりきりになる。

「……父は、どこへ連れていかれるの」

「今の職場を辞めさせて、寮付きの仕事場に移す。ここには帰さない」

義信の言葉には力強さがあった。夏帆の頭に疑問が浮かんで消えて、うまく質問にならない。「殺されたり、しないの？」

背の高い義信を見上げると首が痛んだ。彼は瞬きをした後、苦笑いしながら背広を脱ぎ、夏帆の肩にかけてくれる。

「ドラマの見過ぎだな」

羽織はらされた上着からは大人の男の人の匂いがした。義信の思わぬ優しさに心臓が高鳴って、こんな時なのにと自分を叱る。

大きな手に肩を何度も擦こられると、頬が赤く染まっていくのがわかった。

「まだまだ冷える。暖房が効いてないから上着で我慢してくれ」

部屋にあるエアコンはあまり効かなくなっていて、専ら電気ストーブを使っている。『エアコン、

壊れかけているんです』とさえばいいのに、恥ずかしさのせいで喉の奥に引っかかって出てこない。夏帆は黙ったまま上着と、擦すつてくれる手の温かさに頼った。

「ありがとうございます、その、父は……」

父はどうなるのか、自分は何を求められるのか、何ひとつわからないのに、彼の手に温められて、体はぬくもりを取り戻しつつある。

玄関に視線をやると、弘樹の気配がまだある気がした。胃がぎゅつと締め付けられて泣きそうになる。

「あなたが心配している事態にはならないから大丈夫だ」

はっと顔を上げた所、義信は見る者を安んずせるような微笑を浮かべていた。「借りるよ」と言つて、彼は狭い台所の隅に置いてある簡素な折り畳みの椅子を持ってきて開いた。

そして立っていた夏帆の腕を取って、そこにゆっくりと座らせてくれる。極度に緊張していたらしく、腰を下ろすとどつと疲れが襲襲ってきた。

義信が何の躊躇ちゅうちゆもなく床に膝をついて夏帆はぎよつとする。台所の床拭きは一週間に一度しかしていない。

「ゆ、床が汚いの。そう、汚いから、スーツが汚れてしまう」

義信は慌てた夏帆の両手を握り、見上げてきた。心臓を掴まれたような衝撃に、包まれた手はほとんど熱くなり、喉がカラカラになった。

テレビでしか見た事がないくらい端整な顔に真剣に見つめられて、思考は完全に停止する。

「スーツは大丈夫だ。あなたの父親も大丈夫だ。心配しなくていい」

迫力に気おされて、夏帆はこくくと頷いた。

「まず、息をした方がよい。大きく吸って」

夏帆は義信の誘導に従つて、詰まっていた呼吸を整える。

胸のつまりが無くなると、義信は見計らつたように手を離して立ち上がった。次いでこく自然に、頭にボンツと触れてくる。

「良い子だ」

親し気な笑みを向けられてまた呼吸が止まった。子供扱いされているのに嬉しい。

立ち上がった義信は台所を見回す。

「話をしなくてはならない事があるが、あなたは話が出る状態じゃない。まずは熱いお茶だな。

勝手に使うぞ」

急に口調が砕けた義信は、明らかに高さの合っていない台所に立った。

「お茶……、安物しかありません……」

お客様にお出しするような立派なお茶の葉は無い。茶筒に入っているのは、淹いれると粉が浮いてくる安物だ。

「色がついてればいいんだよ」

義信は茶筒をすぼんと開ける。

「お金持ちでも、そうなんですか」

「何でも楽しむのが肝要だ」

あつさりと言われた言葉に親近感を覚え、夏帆は微笑んだ。

「気さくな義信になら何を聞いても大丈夫な気がして、勇気を出して尋ねる。」

「……その、わ、私との、結婚も？」

父親が言った結婚の話は、「冗談だと答えて欲しかった。」

「ああ、楽しめればいいと思っっている」

急に表情を固くした義信に、なぜか夏帆が傷ついた。

「それに結婚といっても契約結婚だ。その決まりの範囲内でお互い自由に過ごせばいい」

契約結婚だというのは初めて知ったが、やはり結婚はする事になっているらしい。結婚というのは愛し合っている男女がするものだと思っていた。

現実感が無くて、夏帆は台所に立つ義信の横顔をぼんやりと見つめる。父親が水場に立つ姿なんて見た事も無かったから、とても不思議な光景だ。

義信の手際の良さに、お茶を淹れてあげるような人がいるのだろうかと感じた。

「……でも、好きな人、いますよね？」

「ロマンチストだな。さすが」

義信はふっと笑って宙を見た。誰かを思い起こしているらしき仕草に胸が痛む。

会って間もない夏帆にも気遣いが出来て、これ程素敵なのだから彼女がいて当然だ。どんな事情かは不明だが、父親である弘樹の借金のせいとその人と結ばれないのだろうかと思うと、ぞっとした。

夏帆は椅子から下りて、その場に正座をすると膝の前に指をつく。

「ご迷惑をおかけしまして申し訳ありません。でも、結婚は好きな人とすべきだと思います。お金の事はどうかします。だから……」

頭を下げて謝る事しか出来ない。自分の無力さをはがゆくて情けなくて、唇を噛む。

義信が立つ気配がしたと思ったら、夏帆の前にしゃがんだ。それから、後頭部をトントンととても軽く叩かれる。

「土下座しても何も解決はしない上に、冷えて風邪を引くだけだ。結婚であなたを悪いようにはしない。そうだな、不安で当然だ。配慮が足りずに悪かった」

思ってもみなかった言葉に夏帆は顔を上げた。義信の優しい態度に目が潤んでいく。

「でも、父が」

「いいから、まずは茶だ」

ちようど、やかんが笛を吹き、ピーツと夜の時間にそぐわない音が空気を震わせた。

「ほら、湯が沸いた。何かしていないと気が紛れないのなら手伝ってくれ。立てるか」腕に触れてきた義信の手は、肌寒い部屋には不似合いな程に温かい。

「……それに好きな人がいたとして、想いが通じるとは限らないだろう」

義信が一瞬だけ見せた泣きそうな顔に、はっとした。

「ふ、振られたんですか」

これだけ完璧に見えるのに、と夏帆は目を丸くする。

「元氣そうじゃないか」

「元氣じゃないです……っ」

義信は破顔して、少し強めに頭をぐりぐりと撫でてきた。髪が乱れるし、心臓はどきどきとうるさい。顔が赤くなってるのがバレませんようにと願いつつ、彼の手を借りて夏帆は立ち上がった。

飲み会の酔いはすっかり醒めてしまった。楽しかったあの時間も、既に遠い昔のようだ。

夏帆は義信に淹れて貰ったお茶を飲みながら、斜め前に座る彼が『結婚』について喋るのを聞いていた。

「俺は仕事の信用を得るために結婚しなくてはいけない。詳しい契約内容はこれを読んでくれ。ただ今まで通りに働く事と、結婚を外部に漏らさない事は最重要事項だ。守って欲しい」

正方形のコタツに置かれた契約書、高級そうなボールペン、それと名刺。

……羽成創建設、社長、羽成義信。

聞いた事がある会社の名前と肩書に、夏帆は固まった。怖い職業どころか、立派な会社の社長だ。「じゃちよ、う」

義信はどう見ても三十代だ。あの会社の社長はこんなに若いんだ、という感想を抱いた。

それと同時に、会社の社長が犯罪に手を染めるはずはない、父親は安全だとほっとする。

夏帆は、年上の男性で、社長であり、父親の借金を肩代わりしてくれる義信をなんと呼べば良いか迷い、無難に肩書で呼びかける。

「……あの、社長さん。質問をしても良いですか」

「なぜ結婚相手に『久我夏帆』を選んだのかという質問なら、契約が成立しやすと思うたからだ」

すらすらと答えられて、肩を落とした。一目惚れでしたなんて台詞を期待していたわけではないが、やはり落ち込む。

「違います。父親の借金の事です」

「娘が気にする事じゃない」

「娘だから、気にしないといけないと思います。いつからのものとか、知っていますか？」

血の繋がっている自分が把握していないのは怖い。パチンコや競馬に行っている事は知っていたが、のめり込んでいたのだろうか。自分の観察力の無さが悔しい。

義信は少しの間の後、口を開いた。

「膨らませたのは、たぶんここ一年くらい」

「い、一年？」

短大卒業後、夏帆は今の会社に就職した。家計はだいぶ楽になったし、一年前には父親の小遣いも増やした。良かれと思ってした事で、悪い方へとハンドルがきられたのだ。

肩にかけてままの義信の背広がやけに重く感じる。

「そう、ですか……。あの、母方の祖母と知り合いなんですか？ 私、会った事が無くて」

話題を変えたくて、祖母の話をする。祖父母とは会った事が無く、昔から友達の話羨ましく聞

いていた。いるのなら、会ってみたい。

「それに、どうして祖母の知り合いというだけでお金を工面してただけるんですか」

義信はマグカップに入った味の薄い、お世辞にも美味しくない緑茶を飲んでいた。コトン、とそれを机の上に置くと、どこか冷たく聞こえる声で答える。

「昔、お世話になったからだよ」

夏帆はもつと聞きたいと身を乗り出した。義信は契約書を指で押さえて、夏帆に言う。

「社会人だろう。契約書には全て目を通さないと駄目だ」

これ以上は答えるつもりがないとの牽制にも聞こえた。祖母の事を知っている人に会えた高揚はすつかり萎んで、夏帆は下を向く。

「あの、結婚じゃなくて、私が借金を返すんじゃないんですか」

相手がどんなにかっこよくても、初めて会った人といきなり結婚するのは無理がある。

「奨学金と父親の借金をひとりで返すつもりか。やめておけ」

奨学金の事まで知っているんだ、と夏帆は目を丸くした。でも何も知らずに結婚を申し込むはずもないかと思ひ直す。

「私、働きます。まだ若いし、どうにか」

義信は無表情で、光沢のある黒のボールペンをノックした。それを夏帆に差し出す。

「読む気が無いならいい。悪い事は書いていない。それと、役所で婚姻届を出すからこれも書いてくれ」

契約書の下から、義信の名前が書いてある婚姻届を出してきた。退路がどんどん塞がれていく。

「これ、社長さんにメリットはあるんですか。だつて」

「自己主張の激しくない書類上の妻が欲しいからだ」

良い子ね、ちゃんとしているね、気丈な子だね。今まで言われ続けていた言葉がまた積み重なった気がした。

……私は良い子じゃない。

夏帆は顔を上げて、義信の目を見据える。

「初めて会ったのに、どうしてそんな事がわかるんですか」

義信が僅かに目を細めたのを見て怯んだが、夏帆は負けずに続けた。

「社長さんが父の借金を肩代わりしてくれたから、私が結婚をしなくちゃいけないんですか」

「そういう事になるな」

「でも、さつき、父親の借金は娘が気にする事じゃないって言いました」

ねめつける気は無かったが、つい視線がきつくなる。義信は夏帆の視線を真正面から受け、少しの間の後、にっと笑った。

「賢い女は好きだ」

また夏帆の顔が赤くなる。義信の大きな手にボールペンを握らされると、心臓が大きく打った。

「サインをして欲しい」

懇願するように言われてサインしてしまいそうになる。けれど、義信に得になる事が見つからな

い、と冷静に考える自分もいた。

借金が返せないかどうか、頭の中で貯金通帳を捲<sup>めく</sup>ったがとうてい足りない。入社二年目の二十二歳が一括で返すのは無理な金額だし、分割だと十数年かかるだろう。

そうだとしても、こんな優しい人は、好きな人と結ばれた方がいい。

「……私、バカだし、自己主張します。そうだ、結婚式をしたいと言いつたら困りますよね」

夏帆の知恵を絞った足掻<sup>あが</sup>きに、義信は固まり、それから嘖<sup>げ</sup>き出した。

「かわいい自己主張だな。ふたりきりの式で良ければ挙げられる。契約書に書いてある内容は、婚姻期間中はお互いに誠実である事。生活費は俺が持ち、家事全般はあなたがする、などだ」

今度はかわいい、ときて夏帆は首まで赤くなった。しかもふたりきりなら式を挙げると言われて、ますます彼の意図がわからなくなる。

「悪い条件ではないはずだ」

夏帆にとつては良い条件だが、義信にとつては悪い条件だ。

これ以上は何を言ってもダメだろうと判断して、契約書にざつと目を通して見たが、疲れているせいか頭に入っていない。難しい言葉で、難しくはない事が書いてある印象は受けた。

夏帆は手に馴染<sup>なじ</sup>まない高級な重いボールペンを、手の中で持て余す。

「父は、無事なんですよね」

「俺は犯罪を犯せない」

義信はテーブルの上の名刺を指でコツコツと叩いた。確かに社長が罪を犯したら、会社が大変な

事になる。

気を取り直してもう一度契約書に目を通そうとしたけれど、どこかへ連れていかれた笑顔の父親がちらついて集中出来ない。

何だかとても疲れた。そう思った瞬間、ふつと緊張の糸が切れた。

「……何かあれば、乗り越えるだけ。」

突き動かされたみたいに、夏帆はサラサラと書類にサインをする。今ここで悩んでも何も変わらない。乗り越えるしかないのだ。

「……腹を括<sup>くく</sup>ったか」

「悩んでも、何も始まらないから」

夏帆が書類を書き進めながらぼそりと言うと、義信は静かに口を開いた。

「悩む事も大切だ。だが、もうひとりで乗り越えなくていい」

言葉が、胸の中にするりと入ってきた。まるで夏帆の過去を知っているような口ぶりにペンが止まる。

「え……」

「ペンが止まったぞ」

「あ、はこ」

促<sup>うなが</sup>されて夏帆は書類に視線を落とした。この婚姻届と書かれた紙が本物か偽物かもわからないがさすがに緊張する。

義信は冗談ではなく、本当に夏帆と結婚しようとしているのだ。彼は夏帆が書き終わった書類一式に目を通し、腕時計で時間を確認した。

「いい時間だな」

書類が新品のクリアファイルにしまわれるのを、不思議な気持ちで見つめる。

「今から役所に行つて、ここには戻らない。必要最低限のものは後で運ぶ。出るぞ」

急な展開に、夏帆は瞬きを繰り返した。

「もしかして、私、もうここには住めないの？」

心の支えになつてくれた大家族を思いながら、立ち上がった義信に聞く。

「契約書に俺の家に住むと書いてあつただろう。今夜からだ」

読まずにサインをした自分が悪いのはわかるが、気持ちの準備をする時間さえもないのは辛い。

母親がいなくなった日のようにだと思ふ。手の中から『日常』がサラサラと落ちていく無力感。いきなり全てが変わつていく事に、胃がキリキリと痛んだ。

夏帆は肩にかけていた背広を義信に返す。

「ありがとうございます」

「役所まで車で行くから、着ていてもいいんだぞ」

「大丈夫です」

疲れて余裕が完全に無くなって、ポジティブに考える事が出来ない。家を出るとひやりと冷たい風に頬を撫でられ、口を開くのも億劫になった。

「足元に気を付ける」

古いアパート特有の、急な傾斜の階段を先に数段下りた義信が振り返つて言う。心配し過ぎだと思いつつ下りていると、もう何年も使っている階段なのに足を踏み外しそうになった。

咄嗟に手すりを掴んで落ちずに済んだが、心臓がばくばくいって、手先は微かに震えている。

義信は焦つた顔で夏帆に腕を伸ばしていた。その心底から心配しているらしき表情に、胸がぐつと詰まる。

「大丈夫だ」

階段を上がつてきた彼は夏帆の肩を抱え、体を支えてくれた。自分をすっぽりと包む、大きな体。義信に肩を抱えられたまま、夏帆は階段を下りる。この階段をこんなに長く感じたのは初めてだ。下までつくと安堵で息を吐いた。

さすがにもう階段の下に大家族の姿は無い。挨拶をしたかったが、時間が遅いので諦めた。アパートの下には先程の黒塗りの車とは違う、夏帆もよく知っている燃費が良い車が停まっている。

ドアを開けた義信に促され、助手席に体を沈みこませた夏帆は、運転席に乗り込んだ彼に聞いた。

「社長さんが運転するの？」

「運転出来るのか？」

思わぬ返しに、夏帆は首を横に振る。

「出来ないです。免許がないから」

「なら、免許を取りに行けばいい」

夏帆はきよんとした。運転免許を取りに行くにもまとまったお金が必要だし、現実的ではない。はいともいいえとも答えられないまま、数十分後には役所の駐車場に着的いた。役所の古い建物に夜に見るとやけに陰気で、夏帆の気持ちをさらに落ち込ませる。

何も喋らない義信の横顔に不安が募った。誰がこの結婚を望んでいるのだろうか。未知への恐怖が夏帆を饒舌にした。

「社長さん。私のお母さん、ある日、帰ってこなくなっただんです」

なぜ急にこんな事を言い出したのか自分でもわからないけれど、夏帆は膝の上で拳を握りしめながら、泣きそうな顔を義信に向けた。

夫婦というものが、どんな会話をしてどう暮らしていくのか、全く想像が出来ない。

「父親は自由人で、家賃を滞納していなかったのが不思議なくらいで」

運転席の義信が真剣な表情で、話の続きを待ってくれている。その真摯な姿に、この人を巻き込んではいけないと夏帆は強く思った。

身を乗り出して、はっきりと伝える。

「社長さんみたいな人は、好きな人と結婚すべきです」

こんな立派な人が、『結婚しなくてはいけない』という理由で結婚をすべきではない。

「私と結婚したらきつと社長の足を引く張る。不幸をうつしちゃ——」

唇に義信の親指が当てられた。それ以上喋るなどという意味だろう。僅かに開いたままの唇から漏れた息が、彼の親指にかかるのがわかった。

「覚えておけ。まず、貧困も不幸も遺伝しない。もちろん、感染もしない」

義信が微笑して言った言葉が夏帆の心に染みこみ、みるみるうちに目に涙が溜まっていく。

「自分の足を引く張るのは自分の考え方だ。他人じゃない事を覚えとけ」

涙が、頬を伝ってぼたぼたと落ち始めた。

「どうせなら自分を幸せにすると決めろ」

人は明るく元気に振る舞っていれば、うまくいっていると判断する。だから夏帆は憐れまれたくなくて、無理にでも明るくしてきた。

「自分は不幸だと思うより、よほど根性があるがな」

そういう孤独な覚悟を義信は知っているのかもしれない。彼の言葉は厳しいのに、どこか優しい。……この人は健全な大人だ。

「ごめんなさい」

ぼろぼろと涙が零れた。夏帆が、弱音を吐いても何も変わらない事を悟ったのはいつだっただろう。こうやって弱音を吐いたのは、いつたい何年ぶりだろう。

義信はハンドルをぎゅっと握んで深く息を吐くと、シートベルトを外す。

「後で、セクハラとか言うなよ」

大きな体を乗り出し、夏帆のベルトを外した。近さにどぎまぎしたのも束の間、抱き寄せられて目を丸くする。吸い寄せられるように頬をびたりと厚い胸につけると、スーツの上着を貸して貰った時よりも濃い男の人の匂いがした。

「気持ちを整理する時間がなくて悪い」

安心感に包まれるとともに、疲れと眠気が急に襲ってきて、夏帆は目を閉じた。

薄暗い部屋の中で目が覚めた。視界に入ってきた見知らぬ白い天井に戸惑った夏帆だが、ややあつて結婚した事を思い出す。

昨晚、落ち着くまで胸で泣かせてくれた義信は、あの後、役所に婚姻届を出しに行った、と思う。すっかり眠ってしまい、義信が車を降りてしばし経ってから戻ってきた事をおぼろげに覚えているだけだ。次に肩を揺すられて起きた所、そこはビルの中のような駐車場だった。

車を降りて駐車場の通用口をくぐると、非常階段のある廊下に出た。階段の傍の扉は絨毯が敷かれた内廊下に繋がっていた。あまりの豪華さにホテルなのかと思った。

だが義信にマンションだと教えられて、寝ぼけながらも夏帆は目を瞬かせる。

着の身着のまま連れてこられた高級マンションの、ヒールの音さえも消すふかふかの廊下を縮こまりつつ進み、家のドアの前で止まった。

玄関から入ると、鏡がついた壁一面の靴箱、高い天井と光が反射する三和土に出迎えられて怯む。広いリビングダイニングに呆然としたのも束の間、義信がひとつの部屋のドアを開け、夏帆を呼んだ。

彼の後ろから覗き込んだ所、寝心地の良さそうなベッドの脇に、既に夏帆の荷物が積まれている。

『今日は寝るといい。おやすみ』

いつの間に運び込まれたのか——そんな疑問さえも口にさせてくれないまま、義信はリビングへと足を向けた。

そうして一晩経った今、抱き寄せられたのを良い事に甘えて貰った事を思い出し、恥ずかしさが胸に突き刺さって息苦しくなる。

「ああ、もう……っ」

夏帆は枕に顔を押し当てた。耐えきれず起き上がって、部屋に置かれている全身が映る姿見の前に立つ。

泣いたせいか、腫れぼったい目が自分を見つめ返してきて、がっくりと肩を落とす。荷物の中から引つ張り出した愛用のスウェットは、改めて見るとずいぶん古くなっているのがわかって、恥ずかしい。黒い髪はただ胸の辺りまで伸ばしているだけだし、大きくない胸のせいで、女としてのアピールは少ない。

はああ、と重い溜息を吐いて、夏帆は鏡に背を向けてスマホを見る。もう朝の六時だった。

契約した通り朝ご飯を作ろうと、慌てて部屋から出た所、美味しそうな香りが鼻腔をくすぐる。

リビングダイニングに足を踏み入れると、カウンターキッチンに義信がいた。彼はワイシャツとストラップス姿に紺のエプロンをつけ、料理をしている。

「おはよう。眠れたか」

腕捲りで調理をする義信の手際は良かった。男の人が料理をするのは調理実習とテレビの中だけだと思っていたのでびっくりした。おまけに、テレビの中の人よりカッコいい。

この人が夫かとポカンと見つめていたが、すぐに我に返る。

「おはようございます。眠れました」

「なら良かった。フローリングは冷えるから、スリッパを履いた方が良い」

義信はソファの傍にある、見るからに新しい女物のスリッパを顎で指した。履くと足にびつたりで、夏帆は驚く。

「ありがとうございます。——わあ、このスリッパ、底が柔らかくて気持ち良いですね。おまけに真っ白でかわいい。んー、汚れが目立ちそうなので履くのがもつたいないような……」

「スリッパは履いてこそだろう。丸洗い出来るみたいだから洗って使えばいい」

その場ではしゃいで足踏みしていた夏帆を、義信は笑う。彼の口ぶりに、洗濯表示まで見て買ったのだからと、少し違和感を覚えた。

「これ、私が履いていいんですか？」

Sサイズの小さなスリッパ。この家に出入りする誰かのものではないかと心配になる。

「俺が履けるサイズではないな」

「いえ、その、ただ、彼女さんのかと」

義信は挑むように夏帆を見つめて、それからフライパンの中にあつたスクランブルエッグをふたつの皿に移した。

「妻がいるのに彼女を作ったら、『お互いに誠実である事』にひっかかる」

妻、という言葉に夏帆が赤くなると、義信の強張っていた顔が緩んだ。

自分が彼の妻だという事実が信じられないが、義信の口から言われると本当なのだと思う。

夏帆は落ち着かない気分で部屋を見回す。二十畳はありそうなりビングに、カウンタースキッチン近くにあるテーブルには椅子が四脚。少し離れた所に、高級そうな幅広の布のソファもあつた。床面積が広い部屋は、どこか温かみに欠ける気もする。

先程スクランブルエッグを移した皿の上には、他にハム、フリルレタス、ミニトマト、ブロッコリーがあつて、いろいろがきれいだ。テーブルの上にはパンが入った籠に、オレンジジュースのグラス、カトラリーも出している。

どこかのホテルみたいな朝食に、夏帆のお腹が小さくきゅると鳴った。音が消せるわけでもないのに、慌ててお腹を押さえる。

「朝飯は食べられるだけでいいから食べよう」

「食べていいんですか？」

義信はミネストローネをスープボウルに注ぎながら、「いいにきまつてるだろう」と呆れたように言う。

「いただきます。ありがとうございます」

「良かった。なら用意を手伝ってくれないか。これをテーブルに持っていつてくれ。冷蔵庫にドレッシングが入っているから、好きなものを出していい」

「はい」

夏帆はすぐに駆け寄って、スープボウルに手を伸ばす。スープには四角く形を揃えられた、にん

じん、ベーコン、じゃがいも、たまねぎが入っていて、目にした瞬間、口の中に唾液がたまった。「美味しそう……。社長さんは何でも出来るんですね」

素直な感想を口にする、笑みを浮かべた義信と目が合う。

「何でもは出来ないな」

謙虚な返事がおかしくて笑みを返すと、ぐっと距離が縮まった気がした。

浮つく心をもてあましながら、スープをテーブルに運び、次に大きな冷蔵庫を開ける。中はそれなりにものが入っているが整理整頓されていて、賞味期限切れのものなどは無さそうだ。

ドレッシングは三種類あったのでとりあえず全部持っていくと、捲り上げた袖口を直した義信がエプロンを外してテーブルについていた。

「社長さんがどのドレッシングが好きかわからなかったので、全部持ってきました」

「三種類もあったか」

義信は苦笑する。

「今度から自分がどれを好きかで選んでいいぞ。どれも不味くはないはずだ」

きよとん、と夏帆は義信の顔を見た。そして、今まで自分がどれを好きかよりも、父親に文句を言われないように選んでいた事に気付いて、はっとする。

「……あ、ありがとうございます」

どきん、と心臓が高鳴った。好きなものを選んでいいと言われただけなのに、嬉しくてたまらない。「えっと、なら、どれも美味しそうだから、今日は全部少しづつ使わせて貰っていいですか」

「構わないが、皿の上で味が混ざるの、見ている俺が無理だ……」

義信は立ち上がると、カウンター内から小さめの皿を三枚とって、差し出してくる。

「これを使ってくれ」

カウンター越しに、夏帆は皿を受け取った。

「そんなに混ざる程ドバドバかけないですよ。お皿を使ったら洗い物が増えるだけです」

「いや、俺が気になる。皿は俺が食洗機が洗うから問題ない」

クールそうな義信が見せたかわりに、呆れながらも親近感を覚えた。まだ緊張はしているけれど、警戒心はどんどん薄れていく。

これまでは毎日自分で用意してきた朝食が、何もしていないのに目の前に広がっているのは魔法みたいだ。朝食を作れなかった事は契約違反になるだろうか。夏帆は豪華な食事を見渡してから、おずおずと口を開く。

「社長さん。家事全般は私って、契約書に書かれていた気がします。さっそく破ってしまっ、すいません」

頭を下げた夏帆に義信は言う。

「書いていたな。だが、俺が料理をしないといけないとは書いていなかった」

少しは怒られるかもと身構えていた夏帆は肩透かしを食らった。

「……そう考えることも……。出来るんですね」

「子供にはわからないだろう」

子供扱いされて、胸がツキンと痛んだ。そうか、彼はきつと保護者のような気持ちで良くしてくれているのだ。

……わかるようになれば、ちよつとは女性として見て貰えるのだろうか。

そんな欲を抱いた自分に驚くと同時に、恥ずかしくなった。

その気持ちを誤魔化すように食事を始めた所、とても美味しくて目を丸くする。

「わあ、スクランブルエッグ、凄く美味しいです。私、硬くなり過ぎたり反対にトロトロになり過ぎたりして、なかなかうまく出来ないから感動……。プロッコリーの茹で方もすつこちようどいい……。社長さん、料理教室にでも通ったんですか」

「プロッコリーの茹で時間を習いに料理教室に行く、それ、時間の使い方を間違っていないか」

「いや、そこがポイントではなくてですね。このスープの野菜も自分で切ったんですね。凄いなあ。でも、手間がかかりましたよね……」

「手伝ってくれそうな誰かはよく寝ていたからな」

「す、すいません！ あ、でも、さつき、よく眠れたなら良かったって……！」

夏帆をからかってくる義信だが、決して嫌味には聞こえない。

会話を楽しんでるうちに、食事をほぼ平らげてしまった。

夏帆の食べっぷりに微笑した義信がコーヒートを勧めてくれる。

「コーヒートはどうする」

「いただきます」

ぱあつと顔を輝かせた夏帆に、義信は安堵したような溜息を吐いた。

「食欲があつて安心したよ」

こういう状況なら、普通は食が細くなるのかもしれない。けれど、夏帆の手には既に二切れ目のパンがあった。

「だって、美味しいから」

義信がコーヒートサーバーのコーヒートをマグカップに注いでくれる。ワイシャツの袖から覗いた手首は節張つていながらもしなやかで、こんなカロリーが高そうな朝食を取っているのに引き締まっている事を不思議にさえ思う。

「それだけ食べられるなら、ちゃんと話が出来るぞうだ」

義信の声に他人行儀な固さが戻って、夏帆の胃がぎゅつと締め付けられた。履き心地の良いスリッパ、美味しい食事に楽しい会話ですつかり気が緩んでいたが、ここが本当に安心出来る場所かどうかはまだわからないのだ。

顔を強張らせパンを皿に置いた夏帆の前に、義信はコーヒートが入ったマグカップを置く。

「俺は毎日仕事で遅くなるから待っている必要はない。先に寝てくれ。朝食は作るが、夕飯は頼む。そしてこれが生活費だ」

義信はソファの上の鞆から封筒を取り出した。テーブルの端に置かれたそれは見るからに厚みがある。

夏帆の体がぎゅつと籠もった。

「ごめんなさい、父の借金もあるし、受け取れません。それに出来ればアパートに戻りたいです。結婚をした事を誰にも言わない方がいいですよね。だったら別々に暮らした方が良いと思うんです」

なんとかひとりで暮らしていける。家計が苦しくなったら、幸い会社は副業が許されているから、夜にコンビニのレジ打ちか何かをすればいい。

まだアパートには家具がある。戻るなら早い方が良い——そんな気持ちはすぐに打ち砕かれた。

「あのアパートは昨夜引き払い、家具類はこちらで倉庫を借りて保管している。処分して良いもの、悪いものをおいおい教えて欲しい」

一晩でそんな事が出来るのだろうか。夏帆はアパートが既に空っぽという事実、啞然として義信を見た。彼は伏目でコーヒを飲んでいただけなのに、絵になっている。

自分といえば冴えないスウェットの上下だ。正直、別世界の住人だと思えなかった。

「借金は父親が作ったものだ。自立心旺盛なのは結構だが、現実を見た上で、三年後、五年後、十年後の事を考えた方が良い。今はその時間だと思つて有効に使うんだ」

あまりにも寛大な申し出に驚きつつ、夏帆はなんとか言葉を絞り出した。

「でも」

「仕事は辞めずに働き続けた方がいい。婚姻関係にあるのだから、この家で一緒に住み、生活する上での生活費は俺が出す。そういった事は全て契約書に書いてあった。サインをしてから文句を言うべきではない」

ぴしゃりと言われてしゅんと肩を落とした。義信が言っている事は正し過ぎて、冷たく感じる。

近づいたと思つたらしっかりと壁を築かれ、得も言われぬ寂しさを感じながら、夏帆は大人しく返事をした。

「……わかりました。ありがとうございます」

「自分がどうしたいのか、どうありたいのかを考える時間だと思つて欲しい」

……これは、結婚じゃない。保護だ。

現実を突きつけられた気がして、夏帆は唇を噛んだ。義信が新聞を開いて、部屋に沈黙が落ちる。昨夜から今朝にかけての優しい時間は夢だったのだろうか。それとも、何か怒らせるような事を言つただろうか。

ぐるぐる考えつつ義信が読んでいる新聞の見出しを眺めていると、夏帆の目に涙が滲んだ。涙を堪えるためにコーヒを口に運べば、香りが心を落ち着かせてくれる。

「今日も、雨ですか？」

沈黙が嫌で、夏帆は天気的话题を口にする。彼が天気予報にも目を通して様子だったので、聞いてみた。

「予報では昼から晴れるみたいだ」

義信は読んでいた新聞を折り畳んだ。天気予報の部分を上にして差し出され、夏帆はきよんとする。するともう一度差し出されて、慌てて受け取った。

「あ、ありがとうございます」

さりげない気遣いに戸惑いながら天気の話を見た所、雨の横に晴れマークがついていた。

「ほんとだ。昼から晴れるんですね」

「まだ寒い、濡れたら風邪を引くから暖かくしたほうがいい。そうだ、風呂の使い方を教えておく」  
義信は話しかけても無視しないし、こうやって体の心配もしてくれる。けれど、近づくとも離れてしまう。

「毎日ちゃんと入れよ」

にっこ笑われて、夏帆は焦った。確かに昨日は入っていない。

「いつもは入っていますよ。昨日は入れなかっただけで」

義信は笑いながら残りのコーヒーを流し込んだ。

「風呂嫌いを疑っては……いない。今はな」

「やだ、疑ってるみたいじゃないですか。……もしかして私、やっぱり汗くさいですか」

夏帆は慌てて自分の腕を鼻の前に持って来て、においを嗅ぐ。スウェットからは昨日まで住んでいたアパートのにおいがした。これがくさいのだろうか。

義信は立ち上がって、悩む夏帆の横に来るなり、テーブルに手を置いて身をかがめた。

「……っ」

夏帆は息を呑んだ。義信の息がうなじにかかる。触れていないのに体温を感じて、心臓が跳ね上がった。

「良い匂いだ。問題ない」

まるで小動物の匂いを嗅ぐような気軽さ。こういったコミュニケーションに義信は慣れているの

かもしれないけれど、夏帆は違う。

義信は体を起こすと、すぐにバスルームのある方に目を向けた。

「さ、こっちだ。浴びていくだろう」

夏帆は真っ赤になつたうなじを手で押さえながら、ぎこちなく返事をする。

「浴びたい、です」

こうやって近づくのは普通の事なのだろうか。だとすれば、心臓がもたない。

夏帆は困り切った表情を浮かべて、バスルームへ向かう義信の後に続くため立ち上がった。

## 2

最近の天気予報はだいたい当たるなあ、と入社後の夏帆は頬杖をついた。

地面や壁に打ち付ける雨音が、窓を閉めていても聞こえてくるようだ。こんな天気なのに昼から晴れると、義信が手渡してくれた新聞には書いてあった。

今朝、夏帆がシャワーを浴びて廊下に出ると、ちょうど義信が家を出る所だった。少しでも気を抜くと、その時の彼の後ろ姿が頭の中に蘇ってくる。

義信は靴を履くとガラリと雰囲気を変えた。そこには、妄想の世界にしか存在しないと思っていた、真っ直ぐに何かを成し遂げていく、実に男性的な人がいたのだ。

仕事に向かう彼の背中から漂う張り詰めた緊張感と迫力に、こちらまで気が引き締まった。大きくて立派で頼りがいのある背中には、触れるにはあまりにも遠い。

夏帆は窓の外に目をやりながら、深い溜息を吐く。

「……久我！」

横から大きな声を出されてビクリと体を震わせた。顔を上げると、そこには営業部の小池久二がいた。はつと我に返った途端、電話のコール音やキーボードを打つ音が耳に入り、書類を手に忙しく動き回る人が視界に広がる。

「小池さん」

「なんか疲れてるみたいだけど、飲み過ぎた？」

そういえば昨日は小池の隣に座れたり、褒められたりと良い飲み会だった。

「あ、えっと、そうなんですよ。それはもう飲み過ぎちゃいました」

酒に強い夏帆は滅多に酔わない。それを知りながら親し気な笑顔を向けてきた小池に話を合わせる。

「いつか久我が潰れる所を見てみたいな」

「樽のビールが必要ですね」

わざと神妙な顔を見ると、笑った小池に気安く肩をポンッと叩かれた。

「次は樽で注文するよ。で、こっちの在庫と、発注の確認をお願いしたんだけど」

「あ、はい。豊丘通商の商品でいいですか？」

小池が手に持っている書類に載っている社名を見て、夏帆は商品管理ソフトを開く。

「そうそう、話が早くて助かる。商品はこのボールペン」

「あ、既に発注をかけていますね。納品予定は二週間後です」

「これ、ロットはいくつだっけ」

「各色千ですね」

そうやって対応しつつも、今日は仕事に身が入っていない気がした。ふとした瞬間に義信の事を考えてしまい集中力が続かない。

「で、初夜なんだけどさ」

「えっ」

夏帆は椅子から転がり落ちそうになる程驚いた。なぜ突然、小池が初夜などと言い出すのか、結婚がバレたのかと狼狽していると、彼の方が目を丸くする。

「消化率、在庫の消化率だよ。五十%切ったら発注だったよね」

「しょ、消化率」

初夜と消化率、『しょ』しか合っていないのに聞き間違えた自分に愕然とした。まるで義信とそうなる事を望んでいるみたいだ。

結婚しているのだから、そういう事を考えてしまうのはしょうがないと懸命に自分をフォローしている間にも、小池が話しかけてくる。

「この発注で売り切り。次から新デザインでいくから……、どうした？」

小池に心配そうに覗き込まれて、顔が赤くなっているのだとわかった。

「何もありません。すいません。売り切りですね。了解しました」

こういった情報はソフト内の商品台帳の備考欄に打ち込んでおかなければならない。心臓がバクバクいつているせいか、メモを取る文字がぶれてしまう。

「本当に飲み過ぎたんじゃないのか」

少し顔を曇らせた小池に、夏帆は笑顔を作った。飲み会の後にあつた事がうまく消化出来ていないだけだ。よく出社したものだと思つて自分を褒めたい。

「飲み過ぎというより、疲れているのかもしれないです」

「具合が悪かったら早退したほうがいい」

「ありがとうございます。すいません、ぼうつとしてしまつて。ボールペンの件は台帳を更新しておきますね」

仕事の話は終わったはずなのに小池は立ち去つてくれない。

「……悩み事があるなら、いつでも相談に乗るから言つて」

小池の親切に夏帆の笑顔は引き攣つた。営業部のエースに相談するなんて恐れ多い上に、女子社員が目が怖い。そして、何よりそんな気軽な内容ではないのだ。

「ありがとうございます。えーっと、昼夜問わず呼び出させていただきますね」

夏帆が冗談を口にしながらいりやうに頭を下げると、小池は笑いつつ夏帆の背中を書類でポンツと叩き、去つていった。

ほつと息を吐いたのを見計らつたように、同僚の美雪が椅子のキャスターを滑らせて傍に寄つて

くる。

美雪はドアから出ていく小池の背中を見て口を開いた。

「小池さん、夏帆狙いなのがミエミエだよ」

「お酒を飲む人はお酒を飲む人を重宝するだけだつて、何度言えばわかるかな」

二十七歳の小池は皆の憧れ、いわばアイドルだ。彼が行くと言つた飲み会は、女子社員の参加率が高い。しかし、その中に小池の酒量についていける人がいないだけだ。

「それだけじゃないように見えるけど」

「それだけだつてば」

正直、今は小池どころではないため、気持ちの籠もらない返事になつた。

美雪は緩くパーマをかけた毛先を指で弄りながら、小池が去つたドアをまだ見ている。

その横顔に、夏帆は見惚れた。

もし夏帆が美雪のような美人だつたのなら、義信は昨晚、部屋に来たのではないか。夏帆にはどこか保護者のように振る舞つて、女として見ていない様子だ。

お洒落に気遣つてこなかつた事を、初めて悔いる。

電話が鳴つたのを機に、美雪は自分の席に戻つた。

夏帆もパソコンの画面に向き直り、マウスを動かしてスクリーンセーバーを止める。

パスワードの入力を求められてキーボードに手を置いた時、ふと父親の事を思い出した。義信は大丈夫だと言つていたし、きつと無事に新しい職場で働いているはずだ。

でも、働かなくてもいいと考えていたような無邪気な笑顔が気になる。

……あの人は、娘を売ったのだろうか。

そんな思いがふつと浮かんだ瞬間、寒気を感じて腕を撫でた。

今日はとにかく早く寝て疲れを取ろう。

夏帆はキーボードをいつもより強めに叩き始めた。

夕食作りのために、夏帆は会社帰りに近所のスーパーへ寄った。無理は続かないのだからと、いつも使っていた庶民的な食材を買う事にする。

朝に渡されたお金は、部屋のチェストの中に移動させてそのままだった。

父親の借金を肩代わりして貰った上に、生活費全般の面倒をみて貰うなんて……と考えると、どうしても使えなかったのだ。

どう返すべきかと考えているうちに、マンションの前に着き、気後れしながらオートロック解除の番号を押した。

重厚な自動ドアが開く。目の前に広がった、住んでいたアパートとはまるで違うつくり、緊張する。

広いエントランスには革張りのソファとテーブルが置いてあった。花が活けられた受付に人はいないが、光が反射する程磨かれた床にはゴミひとつ落ちていない。

ヒールのある靴で上るとカンカンと音がするアパートの鉄の階段が懐かしい。なんとか部屋番号

を間違えずに玄関を開けた所で、疲れは最高潮に達した。

喉も少し痛い。義信は遅くなると言っていたし、夕食を作る前に風呂へ入る事にした。買ってきたものを冷蔵庫の中に入れてバスルームに向かい、苦笑する。

朝も見て驚いたのだけれど、全面ガラス張りなのだ。ボタンを押すとスモークが張られるが落ち着かず、慣れるまでに時間がかかりそうだった。

体と髪を洗って脚を伸ばせる程に大きな湯船へ浸かる。テレビもついていて、快適と認めざるを得ない。

珍しさからテレビを見ながら風呂に浸かっていると、あつという間に時間は過ぎていった。

湯を抜いて掃除をし、確認した所、一時間以上経っている。疲れが増していたものの、まだ夕食づくりという仕事が残っていた。

濡れた髪を拭きつつダイニングに戻ると、見知らぬ男が長い脚を投げ出してソファでくつろいでいた。

泥棒と叫ぶ事が出来なかったのは、彼があまりにこの部屋に馴染んでいたからだ。夏帆の気配に気付いた男が振り向き、人好きのする笑みを浮かべた。

「どうも、義信の大親友です」

茶髪の短髪、髭、眼鏡、義信の大親友だと名乗る長身の男前。疲れが何トンにもなつて体に押し加かってきた気がする。

昨夜は父親が連れていかれ、婚姻届を出し、住み慣れた家を引き払う事になった。今日はなんと

か出社していつも通りに仕事をこなした。

そんな一日が終わったと思ったら、今度は謎の男前の登場だ。何でもありの展開に、夏帆は諦めの心境でふっと笑う。

「久我夏帆です」

「俺、真崎翔太。翔太って呼んでよ。夏帆、夕食はまだだよな」

当然のように下の名前で呼ばれて、夏帆は立ち尽くす。

「ほら、翔太って言うてみな」

「……真崎さん」

「しよ、う、た」

何度かこの攻防を繰り返して、翔太が決して折れないとわかった夏帆は観念した。

「翔太……さん」

「よく出来ましたー」

屈託のない笑顔を向けられるが、翔太が夏帆の存在に驚かないのはなぜだろう。

義信の交友関係を一切知らない夏帆は濡れた髪もそのままに翔太へ聞く。

「社長さんとお約束ですか」

「あいつ、夏帆に社長って呼ばせてんの？」

翔太は驚いた顔でソファから立ち上がった。身長は義信より少し低いくらいだろうか。それでも日本人男性の平均身長を大幅に上回っている。

背の高い人に見下ろされて、居心地が悪くなる。夏帆は一步下がって距離を取った。

「私が社長さんって呼んでいるだけです」

「義信はそれに何も言わないんだ。へえ」

翔太は腰に手をやって、夏帆をまじまじと見てくる。堂々と出来るような外見は持ち合わせておらず、さらに居心地が悪くなった。

一方の翔太は痩せ過ぎではない細身で姿勢が良い上に、顔立ちも整っていた。シャツとジーンズというシンプルな格好なのに洒落ている。二の腕などのさりげなく盛り上がった筋肉にも意識の高さを感じた。

そんな男前に、自分のパーツのひとつひとつを吟味されるのはいたたまれない。

「なあ、夏帆から見て義信ってどう？」

「どうって……」

急に聞かれても、語れる程義信を知らない。

彼は、動揺していた夏帆を安心させようとしてくれたし、生活全般の面倒を見てくれる。ずっと一緒に暮らしてきた父親よりも頼れるのは確かだ。

「夏帆からしたらやっぱり怖い？ 身長が高い上に筋肉もあるし、年上で態度もでかいだろう」

「怖くないです」

考えるよりも先に言葉が出た。義信は背が高くてがっしりしているが、近くにいるだけでも圧迫感を覚ええないし、態度が大きいと感じた事もない。翔太がどうしてそんな事を聞いてくるのか疑問だ。